

## 教職大学院における特別支援教育力開発実習の計画と実践

佐々木 全・東 信之\*, 佐藤 信\*\*, 高橋 緑\*\*\*, 藤谷 憲司\*\*\*\*

(令和3年2月19日受理)

SASAKI Zen, AZUMA Nobuyuki, SATOU Shin, TAKAHASHI Yukari, FUJITANI Kenji

Planning and Practice of Special Needs Education Development Training at the Graduate School of Teaching

### 要 約

本稿は、岩手大学大学院教育学研究科教職実践専攻における特別支援教育力開発実習に関する計画と実践について「専門実習の手引き」に沿って報告するものである。特別支援教育力開発実習は、特別支援教育力開発プログラムを選択する院生を対象とする。また、院生のうち、学卒院生を対象とする「特別支援教育力開発実習Ⅰ」と現職院生を対象とする「特別支援教育力開発実習Ⅱ」があり、各々について「専門実習の手引き」では「Ⅰ 身につけたい力」が示され、その実現のための「Ⅱ 具体的活動内容」が記されている。本専攻が開設されて以来5年間において、特別支援教育力開発実習は、「専門実習の手引」に記された大綱的な内容に即しつつ、院生個々の学修ニーズならびに関連する諸条件に即して、修正及び調整され展開された。

### Ⅰ. はじめに

岩手大学大学院教育学研究科教職実践専攻（以下、本専攻と記す）は、2016年4月に第1期生を迎え2020年3月をもって、第3期生を修了生として送り出した。本専攻では、学校教育に関する『理論と実践の融合』の理想のもと、「これからの学校教育をリードする専門的力量を備えた管理職及びミドルリーダー教員を養成するとともに、新しい学校づくりの有力な担い手となる新人教員を養成すること」が目的とされる（岩手大学大学院教育学研究科, 2020）。ここでいう、ミドルリーダー教員にあたるのは現職院生、新人教員にあたるのは学卒院生である。

さて、本専攻の目的を実現するためのカリキュラムは、「専攻共通科目」「選択科目」「実習科目」「リフレクション科目」によって編成されている。

このうち、実習科目は、「専門実習の手引<sup>注1</sup>」（岩手大学大学院教育学研究科, 2020）に即して計画、実施され、その履修内容は、大学院生の属性に応じて選択される。ここでいう属性とは、「現職院生か学卒院生の別」と、「プログラムの別（「学校マネジメント力開発プログラム」「授業力開発プログラム」「子ども支援力開発プログラム」「特別支援教育力開発プログラム」）」、志望あるいは所属する学校種（小学校、中学校、高等学校、特別支援学校）である。例えば、「学校マネジメント力開発プログラム」「授業力開発プログラム」「子ども支援力開発プログラム」のいずれかを選択する現職院生は、所属する学校種（小学校、中学校、高等学校）に応じた実習校において、「授業力開発実習」「子ども支援実習」を履修する。ただし、「学校マネジメント力開発実習」については、選

\* 岩手大学大学院教育学研究科, \*\* 岩手県立盛岡ひがし支援学校, \*\*\* 岩手県教育委員会,

\*\*\*\* 岩手大学教育学部附属特別支援学校

択するプログラムの別を問わず現職院生全員を対象として、独立した内容と形式をもって実施される。また、「授業力開発プログラム」「子ども支援力開発プログラム」のいずれかを選択する学卒院生は、志望する学校種（小学校、中学校、高等学校）に応じた実習校において、「学校マネジメント力開発実習」「授業力開発実習」「子ども支援実習」を履修する。

これに対して、特別支援教育プログラムを選択する院生は、岩手大学教育学部附属特別支援学校を実習校とし、「特別支援教育力開発実習」を履修する。この実習の内容及び形式については、特別支援学校における専門性を鑑み、他のプログラムとは異なる様態をもって計画され実施されている。

なお、「特別支援教育力開発実習」の計画は、本専攻開設以前の予備的・実践的検討（佐々木・岩崎・梅田他，2016；佐々木・杉本・熊谷，2016）を経て構想された。

本稿は、「特別支援教育力開発実習」の計画と実践について、2020年度の「専門実習の手引き」に沿って報告するものである。

## Ⅱ. 特別支援教育力開発実習の計画

### 1. 身に付けたい力と具体的活動内容

「特別支援教育力開発実習」について、現職院生は「特別支援教育力開発実習Ⅰ」（7単位，280時間）を履修する。この内容には、「授業力開発

実習」「子ども支援力開発実習」相当の内容が、特別支援教育における独自内容として含まれている。なお、これに加えて、先に記した「学校マネジメント力開発実習」（3単位，120時間）を履修し、実習科目としての総単位数は10単位となる。また、学卒院生は「特別支援教育力開発実習Ⅱ」（10単位，400時間）を履修する。この内容には、「学校マネジメント力開発実習」「授業力開発実習」「子ども支援力開発実習」相当の内容が、特別支援教育における独自内容として含まれている。

「専門実習の手引き」では、「特別支援教育力開発実習Ⅰ」「特別支援教育力開発実習Ⅱ」における「Ⅰ身につけたい力」が「Ⅰ学卒院生の場合」「Ⅱ現職院生の場合」として「学校マネジメント力」「授業力」「子ども支援力」の観点に即して記されている。これを Table 1 にて一覧した。

これに続いて、「Ⅱ 具体的活動内容」が「Ⅰ学卒院生の場合」「Ⅱ現職院生の場合」として、履修時期ごとに記されている。これを Table 2 にて一覧した。

注1：「専門実習」との用語は、学部生の教育実習や大学院生が実習科目以外の事由で学校を訪問することと区別するために用いられる通称である。

Table 1 「特別支援教育力開発実習Ⅰ」「特別支援教育力開発実習Ⅱ」における「身につけたい力」

内容	「特別支援教育力開発実習Ⅰ」（学卒院生）	「特別支援教育力開発実習Ⅱ」（現職院生）
学校マネジメント力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校経営に係る学校組織全体の仕組みと校内分掌の実際が分かり、組織の一員として教職員がどのような役割分担のもとに相互に連携を図りつつ、学校教育目標の実現に向けて業務を遂行しているか、その実際を通して学校運営への関心を高める。</li> <li>・学校運営において地域とのつながりが重要な意味を持つことを踏まえ、学校が保護者や地域の人々とのような活動を通して連携を図っているか、学校運営における具体的な活動を通して、その実際を理解する。</li> </ul>	（記載なし） <sup>注2</sup>

	<p>・学校運営における学校評価の実際とその適切な活用の仕方が分かり、学校運営を支える学校事務及び安全管理に係る諸活動についての実際を理解する。</p> <p>以上の学校運営に係る諸要因について理解し、学校組織の一員である一教員として果たすべき役割について自覚を深め、学校運営における課題解決に参画できる基礎的能力を育成する。</p>	
<p>授 業 力</p>	<p>・学部での教育実習やその他の実践経験を通して育成された授業力の向上を目指し、授業力の基盤となる児童生徒理解をよりいっそう深めるとともに、個別の指導計画に基づく授業のあり方など、基本的な授業スキルのさらなる習熟を図る。</p> <p>・児童・生徒の学びの質を高めるべく、教材研究の重要性を理解し、その具体的な方法を身に付けるとともに、教科横断的な学びの検証を通して各教科の役割とそのために各教科担当教員が身に付けるべき力が分かる。</p> <p>・研究課題に即して単元の指導計画を作成し、授業実践とカンファレンスを通して他者の意見を受け入れ、自身の授業改善を図ることができる資質を高める。</p> <p>以上の授業構成力に係る諸要因を理解するとともに、実践者として必要な指導力量を適切に認識し、目標実現に向けて授業改善を自ら繰り返し、成長できる基礎的能力を育成する。</p>	<p>・学校現場における管理的な役割を担う教員として、個別の指導計画に基づく授業のあり方など、実習校における教育課題の所在を把握し、その解決を図るための方策を構想できる能力を育成する。</p> <p>・実習校における教育課題を自らの研究課題として設定し、教員間で課題を共有し、協働してその解決に向けて授業改善の側面から取り組みを実践化できる等、問題を解決するために必要な能力を育成する。</p> <p>以上の学校現場における問題解決に必要な諸要因について理解し、授業改善を視点としてスクールリーダーとして必要な基礎的能力を身に付けるとともに、地域の教育現場において指導的役割を担うことへの意欲を高める。</p>
<p>子 ど も 支 援 力</p>	<p>・一人一人の児童生徒の個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動の実践的な意義が分かり、教育目標を実現させるための方策としての学級経営、機能としての生徒指導と教育相談の具体的な方策が分かる。</p> <p>・児童生徒理解を図り支援を実施するためのアセスメントの観点や個別の指導計画作成の要領を獲得し、それを実践的に活用することができる。</p> <p>・生徒指導と教育相談を教育活動に位置づけ、それを学級経営と関連づけながら、遂行することができる。</p> <p>・特別支援学校におけるセンター的機能の中での通常の学級における児童生徒への支援を通常の学級の担任らと連携して遂行することができる。</p> <p>・通常学校における特別支援学級や通級での指導力を身に付ける。</p> <p>以上の子ども支援に係る諸要因について理解し、学校教育目標の実現に向けた児童生徒一人一人の成長に資する一教員として果たすべき役割について自覚を深め、有効な支援を実施するための基礎的能力を育成する。</p>	<p>・児童生徒一人一人の個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動の質を向上させるための方策を検討し、それを適用または開発することができる。</p> <p>・適応上の課題を抱える児童生徒を含めた総ての児童生徒に対する個別及び集団支援の実践的な方策を検討し、それを適用または開発することができる。</p> <p>・特別支援学校におけるセンター的機能の中での通常の学級における特別支援等への支援を通常の学級の担任らと連携して遂行することができるとともに、指導助言できる力を身に付ける。</p> <p>・通常学校における特別支援学級や通級での指導のあり方について指導助言できる力を身に付ける。</p> <p>以上の子ども支援に係る諸要因について理解し、学校教育目標の実現に向けた児童生徒一人一人の成長に資するリーダー的な教員として果たすべき役割について自覚を深め、有効な支援を実施するための基礎的能力と関係組織を運営する力を育成する。</p> <p>上記2種の実習それぞれにおいて身につけたい力の育成を図りつつ、特別支援教育力開発実習にお</p>

<p>上記3種の実習それぞれにおいて身につけたい力の育成を図りつつ、特別支援教育力開発実習において独自に必要とされる児童生徒理解、学習支援力、及び子ども支援力に係る基礎的能力を育成する。</p>	<p>ける管理職教員として独自に必要とされる児童生徒理解、学習支援力、及び子ども支援力に係る指導的能力を育成する。</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------

注2：現職院生は「学校マネジメント力開発実習」を履修するため、学校マネジメント相当の内容は「特別支援教育力開発実習Ⅱ」に含まれない。ただし、逆に「学校マネジメント力開発実習」には含まれない特別支援学校における日常的な学校マネジメント相当の校務内容がある。これは、実習中、日常のかつ必然的に従事するものであり、例えば、校務分掌、学校評価、危機管理業務などである。これらは、リフレクション科目における題材として取り扱うことがある。

Table 2 「特別支援教育力開発実習Ⅰ」「特別支援教育力開発実習Ⅱ」における「具体的活動内容」

	「特別支援教育力開発実習Ⅰ」(学卒院生)	「特別支援教育力開発実習Ⅱ」(現職院生)
1 年 後 期	<p>&lt;学校マネジメント力開発実習&gt; 2W (80時間)</p> <p>○校長及び副校長、学内教頭等による2日間の講義の後、小学部、中学部あるいは高等部主事、生徒指導主事、養護教諭等の仕事内容や責任の一端を理解するために、それぞれの補助業務を通してシャドウイングを行い、各々の立場の業務内容について実践的に理解を深める。</p> <p>○教務主任の職務内容として教育課程の実施に関する総合的調整、教科書・教材等の取扱い、教職員間の総合的調整、関係職員への指導助言等について説明を受けた後、校内分掌での実務補助の活動を通して、学校運営に協力できる資質を培おうとする意欲を高める。</p> <p>○学校経営の在り方と課題についてレポートを作成し、意見交換の機会を通してお互いの意識啓発を図る。</p> <p>&lt;授業力開発実習&gt; 2W (80時間)</p> <p>○学部・学級配属による学習支援及び学級経営について補助業務を通して実践的に理解を深める。</p> <p>○学習支援における子ども理解の内容と方法について、補助業務を通して実践的に学習する。</p> <p>○特別支援学校における児童生徒への支援及び学級経営のあり方と課題についてレポートを作成し、意見交換の機会を通して意識啓発を図る。</p>	<p>&lt;授業力開発実習&gt; 2W (80時間)</p> <p>○学部・学級配属による学習支援及び学級経営について補助業務を通して高度な実践的理解に至る。</p> <p>○学習支援における子ども理解の内容と方法について、補助業務を通して実践的に学習し、指導的な立場から助言できる機会を設定する。</p> <p>○特別支援学校における児童生徒への支援及び学級経営のあり方と課題について管理職としての立場からレポートを作成し、意見交換の機会を通してお互いの意識啓発を図る。</p>
2 年 後 期	<p>&lt;子ども支援力開発実習(センター的機能実習)&gt; 6W (240時間)</p> <p>○支援部長の講話を通して、特別支援学校がセンター的機能を持つ意義と役割について理解を深め、具体的な対応について実践を通して学ぶことへの意欲を高める。</p> <p>○支援部での実務補助の活動を通して、実際の場面での対応に係る知識とスキルを身に付ける。</p>	<p>&lt;子ども支援力開発実習(センター的機能実習)&gt; 5W (200時間)</p> <p>○支援部長の講話を通して、特別支援学校がセンター的機能を持つ意義と役割について理解を深め、具体的な対応について実践を通して学ぶことへの意欲を高める。</p> <p>○支援部での実務補助の活動を通して、実際の場面での対応に係る高度な専門的知識とスキルを身に</p>

<p>2 年 後 期</p>	<p>○支援部業務として他の附属学校及び公立の連携協力校に派遣され、通常学級での特別支援及び特別支援学級や通級での指導にあたる。定期的（たとえば木曜日午後）に実習校である附属特別支援学校に戻り、支援部長に活動を報告する。以上を通じて①通常学級、特別支援学級及び通級における特別支援のあり方、②特別支援学校のセンター的機能実務、③通常学校特別支援教育コーディネーターとの連携を学ぶ。</p> <p>○通常学級、特別支援学級及び通級による指導における特別支援教育及び特別支援学校のセンター的機能のあり方と課題についてレポートを作成し、意見交換の機会を通して意識啓発を図る。</p>	<p>付ける。</p> <p>○支援部業務として他の附属学校及び公立の連携協力校に派遣され、通常学級での特別支援教育及び特別支援学級、通級による指導にあたる。定期的（たとえば木曜日午後）に附属特別支援学校に戻り、支援部長に活動を報告する。</p> <p>以上を通じて①通常学級における特別支援のあり方及び指導助言の仕方、②特別支援学級及び通級での指導のあり方及び指導助言の仕方、③特別支援学校のセンター的機能実務、④通常学校特別支援教育コーディネーターとの連携及び指導助言の仕方を学ぶ。</p> <p>○通常学級での特別支援教育及び特別支援学級や通級による指導、さらに特別支援学校のセンター的機能のあり方と課題について管理職としての立場からレポートを作成し、意見交換の機会を通してお互いの意識啓発を図る。</p>
----------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

2. 専門実習の構造と実習者の心得

「専門実習の手引き」では、「特別支援教育力開発実習」の実施に関わる具体について、「専門実習の構造」として、「特別支援教育力の構成要素」「形態」「内容」の3側面の内容は、次の記述によって説明されている。なお、「専門実習の手引き」における記載は〈 〉のとおり示す。

第一に、「特別支援教育力の構成要素における二重構造」についてである。〈特別支援教育力とは、そもそも一般的な実践力としての「学校マネジメント力」、「授業力」「子ども支援力」を基礎として、特別支援教育固有の内容が上乘せされている。このことは教員免許取得要件の構造と同じである。〉また、この内容は、Table 3にて一覧されている。

第二に、「形態における二重構造」についてである。〈形態として、「アクションリサーチ」と称する毎週木曜日の通年実施のものと、「特別支援教育力開発実習I.II」と称する集中実施のものがある。つまり、実習は一時期には集中的に行われるが基本的には年間を通じて実施される。なお、「アクションリサーチ」は、実習者の希望にもとづき実施され、その内容及び回数の詳細を計画するものである。〉

第三に、「内容における二重構造」についてで

ある。〈内容における二重構造とは、年次毎に実習内容としての重点が変わることを意味する。1年次には、主に授業力開発に力点を置く。2年次には、主に子ども支援力開発に力点を置く。学卒（院生<sup>筆者補記</sup>）にはマネジメント（学校マネジメント力開発の意、以下同じ。<sup>筆者補記</sup>）も併記されている。逆に記載がなくとも実習中は常に、マネジメント、授業力、子ども支援力を学校業務は総合的なものであるため、常時これらにも取り組むことになる。〉

以上を踏まえ、専門実習の進め方が、Table 4にて一覧されている。この内容は、次の記述によって説明されている。〈配属は、実習内容に直結しており、「内容における二重構造と対応して年次毎に変わる。実習中は配属先の一スタッフとして校務（授業及びそれ以外の校務）に当たる。学部・学級の配属は、実習者の研究テーマなども勘案し決定する。ここが授業力や子ども支援力の開発のフィールドとなる。校務分掌の配属は、学校マネジメント力開発の意図にとどまらない。1年次には研究部に配属する。これは授業力開発のために、校内研究に関わることが有益である。そのため、実習者は授業者の1人として、学級担任や当該授業担当者の指示の下、適切に授業を補助し

Table 3 特別支援教育力の構成要素における二重構造

年次	学卒院生		現職院生	
	アクションリサーチ	特別支援教育力開発実習Ⅰ	アクションリサーチ	特別支援教育力開発実習Ⅱ
1	毎週木曜日・通年 マネ、授業、研究テーマ	4W・集中・後期 マネ、授業	毎週木曜日・通年 授業、研究テーマ	2W・集中・後期 授業
2	毎週木曜日・通年 子ども支援、研究テーマ	4W・集中・後期 子ども支援（センター機能）	毎週木曜日・通年 子ども支援、研究テーマ	5W・集中・後期 子ども支援（センター機能）

筆者注：表中の「マネ」「授業力」「子ども支援」はそれぞれ「学校マネジメント力」、「授業力」「子ども支援力」を示す。

Table 4 形態における二重構造

年次	名称（形態）	学部・学級	校務分掌
1	アクションリサーチ（毎週木曜日・通年）	配属の学部・学級あり。 固定的な対応。	研究部
	特別支援教育力開発実習Ⅰ・Ⅱ（集中）		
2	アクションリサーチ（毎週木曜日・通年）	配属の学部・学級あり。 弾力的な対応（支援部業務優先のため）。	支援部
	特別支援教育力開発実習Ⅰ・Ⅱ（集中）		

Table 5 実習者の心得

研究者（リサーチャー）としての心得	教師（ティーチャー）としての心得
<p>次のプロセスを念頭に実習に取り組むこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実践課題の発見</li> <li>・課題解決方法の模索</li> <li>・課題解決方法の開発</li> <li>・課題解決方法の検証</li> <li>・研究成果の発表、現場への還元</li> </ul> <p>※省察プロセスの自覚に努めること。実習による実践知は、リフレクション科目を経て理論知との融合を目指す。</p> <p>※研究倫理に留意のこと。特に子ども生徒等をはじめとする関係者の不利益や礼節を欠くような介入は認められない。</p>	<p>次の教師像を念頭に実習すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童生徒に対してよき教師であること。</li> <li>・教職員に対してよき同僚であること。</li> <li>・その他関係者に対してよき理解者であること。</li> <li>・県民に対してよき公務員であること。</li> </ul> <p>※守秘義務をはじめとする法令を遵守する。</p> <p>※健康や生活習慣など自己管理を徹底する。</p>

実施準備に努める。時には、メインティーチャーとして授業を設計し実施することもある。2年次には支援部に配属する。子ども支援力の内容のうち、特別支援教育力開発プログラムで重点とするのはセンター的機能であり、その実務に関わることが有益である。そのため、実習者は、支援部の一員として、支援部長の指示の下、巡回相談に向いたり、校内の補助業務（時には授業の補佐や

特定児童生徒の観察など）をしたりする。配属学部、学級は基本的には継続するが、弾力的な対応をもって校務を遂行することになる。）

なお、「専門実習の手引き」では、「特別支援教育力開発実習」の実施に関わる「心得」が示されている。これは Table 5 ならびに次の記述によって説明されている。（この心得も「二重構造」といえる。「研究者（リサーチャー）としての立場」

と「教師（ティーチャー）としての立場」である。これらは、段階があるというよりは、二重の立場が入り交じっているといえる。また、アクションリサーチの時期では、実習者が児童生徒や教職員との関係性を構築することが必要である。その関係性の上でこそ、専門実習としてのOJTが成立すると考えられるからである。そして、その営みからこそ実践課題を見いだすことができ、課題解決に向けた取り組みを始めることができる。その取り組みが、集中の時期に重ねられることが理想である。このことから、アクションリサーチへの参加が推奨される。無論、研究の内容や設計によっ

て、専門実習との関わりは多様である。)

### 3 特別支援教育力開発プログラムにおける専門実習での取り組み課題

「専門実習の手引き」では、専門実習での取り組み課題を、前出の「身につけたい力」「具体的活動内容」を踏まえて設定している。これをTable 6に一覧した。この内容として、学校マネジメント力、授業力、子ども支援力開発に資する課題として「校務分掌業務報告書」、「指導案」、「学級経営案」があり、それぞれ収集資料や実践内容に基づく報告と省察内容を執筆する。

Table 6 専門実習での取り組み課題

年次	時期	学校マネジメント力	授業力	子ども支援力	特別支援教育力	全体
1	4月   9月				・個別の指導計画に関する調査の実施	
	10月 11月 12月 1月 2月 3月	・校務分掌業務報告書 <sup>1)</sup>  ・学校評価分析レポート	・指導案 ・授業記録	・個別の指導計画	・個別の指導計画に関する調査報告書	○専門実習日誌 <sup>4)</sup> ○専門実習報告書 <sup>4)</sup>
2	4月   9月	・危機管理業務報告書			・キャリア教育に関する調査の実施	
	10月 11月 12月 1月 2月 3月	・校務分掌業務報告書 <sup>3)</sup>	・通常学級における授業記録	・センター機能業務記録	・キャリア教育に関する調査報告所	○専門実習日誌 <sup>4)</sup> ○専門実習報告書 <sup>4)</sup> ○教育実践研究報告書

1) 学卒院生は、児童生徒への支援及び学校経営の在り方と課題について、自身の立場から主事主任の役職に着眼して言及し考察すること。現職院生は、同内容について、管理職としての立場から言及し考察すること。  
 2) 学卒院生は、特別支援学校における児童生徒への支援及び学級経営のあり方と課題について、自身の立場から担任の役職に着眼して言及し考察すること。現職院生は、同内容について、学部主事の立場から言及し考察すること。  
 3) 学卒院生は、通常学級、特別支援学級及び通級での特別支援のあり方及び特別支援学校のセンター的機能のあり方と課題について、自身の立場から特別支援教育コーディネーターの役職に着眼して言及し考察すること。現職院生は、同内容について、管理職としての立場から言及し考察すること。  
 4) 特別支援教育力開発実習Ⅰ・Ⅱにおいて、所定の様式を持って作成すること。なお、様式は必要があればその一部を修正し使用してよい。  
 ※表6内で注釈がないものは、実習者と実習指導者の協議によって詳細を計画しすすめること。  
 ※実習者は、自らの研究等に資する「教育実践研究ノート」を作成し、通年使用すること。この様式等については簡便かつ実効性あるものを開発すること。  
 ※現職院生には、学部教育実習生への助言や岩手県教育委員会等の事業への参加などを別途課すことがある。<sup>注3</sup>

注3：表中、見え消しの部分は「専門実習の手引」における誤表記であり、実際には修正のうえ用いられている。

### Ⅲ. 特別支援教育力開発実習の実践

本専攻が開設されて以来5年間において、特別支援教育力開発実習は、「専門実習の手引」に記載された大綱的な内容に即しつつ、院生個々の学修ニーズならびに関連する諸条件に即して、修正及び調整され展開された。

例えば、学卒院生において、知的障害特別支援学校における授業づくりに関するテーマとした場合と、特別支援教育コーディネーターに関するテーマとした場合があった。両者に対しては、「特別支援教育力開発実習Ⅱ」においては、特別支援教育コーディネーターに帯同するなどして実施される訪問支援の機会について、その頻度や対応する時間帯が相応に調整された。また、実習校が学校公開研究会を予定していた場合には、その運営にも一人の同僚として参画すべく、専門実習の内容や実習期間が調整された。

また、先に記した専門実習での取り組み課題は、リフレクション科目における題材となる。特別支援教育力開発実習に対応するリフレクション科目は、「特別支援・教育実践リフレクションⅠ」「特別支援・教育実践リフレクションⅡ」「特別支援・教育実践リフレクションⅢ」「特別支援・教育実践リフレクションⅣ」であり、一部内容を除き、学卒院生と現職院生が共に学修する。履修時期は、それぞれ順に1年次前期、1年次後期、2年次前期、2年次後期である。ここでは作成物を題材とした共同的な省察が目指され、その成果の一部は、再構成の上、実践報告論文として執筆され公開されたり（例えば、田淵・中軽米・上川他，2019；小山・上川・田淵他，2019）、各院生の教育実践研究報告書の一部とされたり（例えば、坪谷・上川・小山他，2018）した。山本・大谷・伊藤他（2020）は、子ども支援力開発プログラムを選択した院生のテーマ選定について、「実際に実習の過程が活かされたものもある一方で、問題の発想にのみ資する場合や研究の中で取り組まれたカテゴリーの作成にヒントを提供するに留まったものもある。さらに実習等とは全く関係することなく追究されたものもある」とし、これらの関係について整理

することを今後の課題としている。一方、特別支援教育プログラムを選択した院生がこれまでに選定し、教育実践報告書として提出したテーマは、知的障害教育における授業づくりにかかわるものが4編、特別支援教育コーディネーターにかかわるものが1編であった（岩手大学大学院教育学研究科，2018；2019）。いずれも、「専門実習における作成物」に含まれる、あるいは関連する内容であるといえ、実習科目が、リフレクション科目と教育実践研究報告書と関連づけられていた。

さらに、専門実習の作成物あるいは教育実践研究報告書の中には、実習校における校内研究や実践に対して貢献するものもあった（例えば、上川・田淵・小山他，2019；中軽米・田淵・佐々木他，2020；田淵・佐々木・東他，2020）。専門実習においては、院生の学修ニーズの充足と、実習校への貢献の両立をめざしたい。貢献をめざすプロセスは、院生の学修であり、確かな貢献は、学修の成果であると同時に学修の内容にもなるといえよう。

今後、特別支援教育力開発実習が院生の力量形成及び力量の向上に対して、いかに寄与しているのか、実質的な評価をもとにした改善が必要であろう。また、院生の力量形成及び向上のプロセスが明らかにされる必要があるだろう。

### 文 献

- 岩手大学（2020）令和3年度岩手大学大学院教育学研究科教職実践専攻〔教職大学院〕（専門職学位課程）学生募集要項。
- 岩手大学大学院教育学研究科（2018）岩手大学大学院教育学研究科教職実践研究報告書 題目一覧。岩手大学大学院教育学研究科研究年報，3，276-277。<https://www.edu.iwate-u.ac.jp/master/wp-content/uploads/2019/04/c9657e374da5e-652916aeb30190e8d12.pdf>（2020.9.13.閲覧）
- 岩手大学大学院教育学研究科（2019）岩手大学大学院教育学研究科教職実践研究報告書 題目一覧。岩手大学大学院教育学研究科研究年報，4，270。<https://www.edu.iwate-u.ac.jp/master/wp-con>

- tent/uploads/2020/06/d00c7ef1fececc58708c09e-0459be387.pdf (2020.9.13.閲覧)
- 岩手大学大学院教育学研究科 (2020) 専門実習の手引き.
- 上川達也・田淵健・小山聖佳・中軽米璃輝・藤川健・中村くみ子・山口美栄子・昆亮仁・高橋幸・伊藤慎悟・阿部大樹・小山芳克・安久都靖・岩崎正紀・高橋縁・東信之・佐々木全, 鈴木恵太・池田泰子・清水茂幸 (2019) 附属学校と公立・私立学校の実践研究に関する連携の開発 (3) — 知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の協働的追求を通して—. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集,6,125-132.
- 中軽米璃輝・田淵健・佐々木尚子・大森響生・原田孝祐・藤谷憲司・中村くみ子・阿部大樹・岩崎正紀・及川和恵・日當友恵・佐々木千尋・細川絵里加・齋藤絵美・田口ひろみ・柴垣登・上濱龍也・鈴木恵太・滝吉美知香・東信之・佐々木全 (2020) 知的障害特別支援学校における「自立活動の個別の指導計画の作成と内容の取扱い」の実践要領の開発 (1). 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集,7,85-92.
- 小山聖佳・上川達也・田淵健・中軽米璃輝・高橋縁・中村くみ子・阿部大樹・高橋幸・伊藤慎悟・山口美栄子・昆亮仁・清水茂幸・坪谷有也・最上一郎・佐藤信・東信之・佐々木全 (2019) 知的障害教育における学習指導案様式「ワンペーパー指導案」の提案. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集,6,151-156.
- 佐々木全・岩崎奈央子・梅田良隆・千葉友夏・杉村優花・冬村知佳・三浦伽奈子・福田博美・田村典子・遠藤寿明・名古屋恒彦・鈴木久米男・高橋和夫 (2016) 教職大学院における「学校マネジメント力開発実習」実施方法の開発—学卒院生の能動的取組を促す—手法としてのインタビュー調査—. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集,3,121-126.
- 佐々木全・杉本まゆき・熊谷佳展・立花文子・福田博美・田村典子・遠藤寿明・名古屋恒彦・高橋和夫 (2016) 教職大学院における「特別支援教育力開発実習」実施方法の開発 —特別支援教育の授業力開発に焦点化した模擬実習を通じて— 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集,3,115-120 (2016)
- 田淵健・中軽米璃輝・上川達也・小山聖佳・高橋縁・中村くみ子・阿部大樹・高橋幸・伊藤慎悟・山口美栄子・昆亮仁・名古屋恒彦・坪谷有也・清水茂幸・池田泰子・鈴木恵太・佐藤信・最上一郎・東信之・佐々木全 (2019) 知的障害特別支援学校における観点別評価の具体的要領に関する論考—「主体的な姿」と「育成すべき資質・能力」とのかかわりを前提として—. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集,6,157-162.
- 田淵健・佐々木全・東信之・阿部大樹・田口ひろみ・中村くみ子・岩崎正紀・藤谷憲司・上濱龍也・最上一郎・名古屋恒彦 (2020) 育成を目指す資質・能力を踏まえた「各教科等を合わせた指導」の授業づくりの要領の開発 —特別支援学校の小学部におけるアクション・リサーチから—. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集,7,135-140.
- 坪谷有也・上川達也・小山聖佳・東信之・佐々木全・名古屋恒彦・池田泰子・清水茂幸・田村典子・伊藤嘉亮・山口美栄子・星野英樹・中村くみ子・阿部大樹・小山芳克・安久都靖・岩崎正紀・佐藤信 (2018) 附属学校と公立・私立学校の実践研究に関する連携の開発 (2) —知的障害特別支援学校における研究テーマ「主体性」の協働的追求を通じて—. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集,5,36-43.
- 山本奨・大谷哲弘・伊藤綱俊・村上貴史 (2020) 教職大学院における子ども支援力開発実習の計画と実践. 岩手大学大学院教育学研究科研究年報,4,191-204.